

2022年4月28日

学校名 鈴鹿市立白子小学校

学校長名 浅井 和代

令和4年度 校内研修実施計画書

1. 研究主題

「いきいきと学び合う子どもをめざして」

～説明的文章を中心とした「わかる授業」づくりと学習基盤の充実を通して～

教科・領域 . . . 国語科・説明文

2. 主題設定の理由

(1) 学校教育目標の具現化から

本校は、三重県の北部に位置した鈴鹿市の南東部にあり、東は伊勢湾に面し、西は国道23号線が縦断し、近畿日本鉄道白子駅を中心とした交通の要所に立地している。

地域は、古くから商業、漁業、農業地域として発展してきた。今年度で創立146年を迎えた歴史ある学校である。

学校教育目標に「わかる授業、友だちいっぱい、今日も来てよかったと思える白子小学校」を掲げ、授業を通して仲間と関わり合い、支え合える学習集団づくりを大きな柱の一つとしている。子どもたちが、仲間との学び合いの中で、主体的・意欲的に学習に取り組み、「わかった」「できた」という達成感を味わえば、「もっと知りたい」「できるようになりたい」という学習への関心・意欲が高まり、学力向上につながっていくと考えてきた。

(2) 研究の経緯・児童の実態から

本校児童は、素直で面倒見よく下級生に対しても優しい児童が多い。学習に対しても真面目に取り組む。算数科に対して、苦手意識をもっている傾向があったため、平成29年度から、研究主題「いきいきと学び合う子どもをめざして」において、子どもたちの学び合いを大切にしながら、窓口を算数科にし、基礎学力の底上げ、思考力・判断力・表現力といった課題解決能力の育成、主体的・意欲的な学習態度の醸成をめざして研究を進めてきた。そして、平成30年・31年度に鈴教研の研究委託を受け、研究発表会を行った。児童は、学び合いに抵抗がなくなり、考えを比べたり、多様な考えに気づくことができたりするようになっている等の一定の成果を得た。

その結果、算数に対しては一定の基礎学力が定着できた反面、算数科においても国語科においても記述の問題に課題があることわかってきた。そして、算数以上に国語に苦手意識を抱いていることがわかってきた。

具体的な課題は次の3点であることがわかってきた。

- ① 基礎的な語彙力が身につけていないため自分の伝えたいことを適切に表現できない。
- ② 読解力が弱く、条件に合うように記述する表現力も乏しい。
- ③ 関心・意欲が低く、根気強く課題に取り組むことが苦手である。

これらの傾向は、以下の表からも明らかである。(全国学力学習状況調査 全国比)

	H.28	H.29	H.30	R1	R3
「国語の勉強は好きですか？」	64.9% (+6.6)	59.7% (-0.8)	/	55.9% (-8.3%)	51.3% (-4.6%)
「算数の勉強は好きですか？」	69.3% (+3.3)	73.2% (+7.3)	59.8% (-4.2%)	75%↑ (+6.4%)	61.7% (-13.3)

そこで、今年度からは窓口を国語科に変更し、基礎的な語彙力・読解力の向上、表現力・コミュニケーション力の育成に取り組んでいきたい。

学習指導要領の方向性についても、「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力・人間性の涵養」が示されている。本校の研究はこれらの資質・能力の育成に向けた取組でもあると考える。

3. 主題のとらえ方

(1) 「わかる授業」とは

- ① 「わかった」とする具体的な児童の姿
 - ・ 題材に興味を持ち「やってみよう」という気持ちをもつことができている。
 - ・ 学習の方法を考え、見通しをもつことができる。
 - ・ 追及したい課題に対して、自分なりの考えをもっている。
 - ・ 互いの考えを共有し、共感・納得・深化し合える。
 - ・ 課題に対して、理解や結論を得ることができ、達成感をもつことができる。
- ② 「わかる授業」で教師に求められること
 - ・ 指導のねらいがはっきりしていること
 - ・ 課題が子どものものになっていること
 - ・ 学習内容や活動の見通しを子どもにもたせること
 - ・ 子どもへの支援・指導が適切で、子どもの意欲を高めていること
 - ・ ねらいの達成度を諮るための学習評価が適切であること

(2) 「いきいき」とは

児童が主体的・意欲的に学習に取り組んでいる様子と考える。具体的には次のような姿である。

- ① 課題と向き合い、粘り強く解決しようとする姿
「もうちょっと考えさせて」
- ② 課題解決の中で、新たな課題を見出したり、考えようとしたりする姿
「ほかの生き物だと、どうなるかな」「これは、どうなるのかな」

(3) 「学び合う子ども」とは

児童が互いの考えを伝え合う中で、より分かりやすい考えを見出そうとする子どもと考える。具体的には、次のような姿である。

- ① 自分の考えを見直す（修正）ことができる。
「ここが、違っていたんだな」
- ② 自分の考えをより詳しくする（補充）ことができる。
「ここは、こういう表現にすると、分かりやすくなるね」

③ 自分の考えを深め広げる（発展）ことができる。

「間違っただのは、・・・だからだな」「・・・さんと考え方は同じ（違う）だな」

④ 新たな考えに気づく（発見）ことができる。

「なるほど、そういうふうにも考えることもできるんだ」

(4) 「学習基盤」となる資質・能力とは

「言語能力」「情報活用能力（情報モラル含む）」を指す。

① 「言語能力」とは、学習指導要領の内容に示されている「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力」（「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」）にことである。

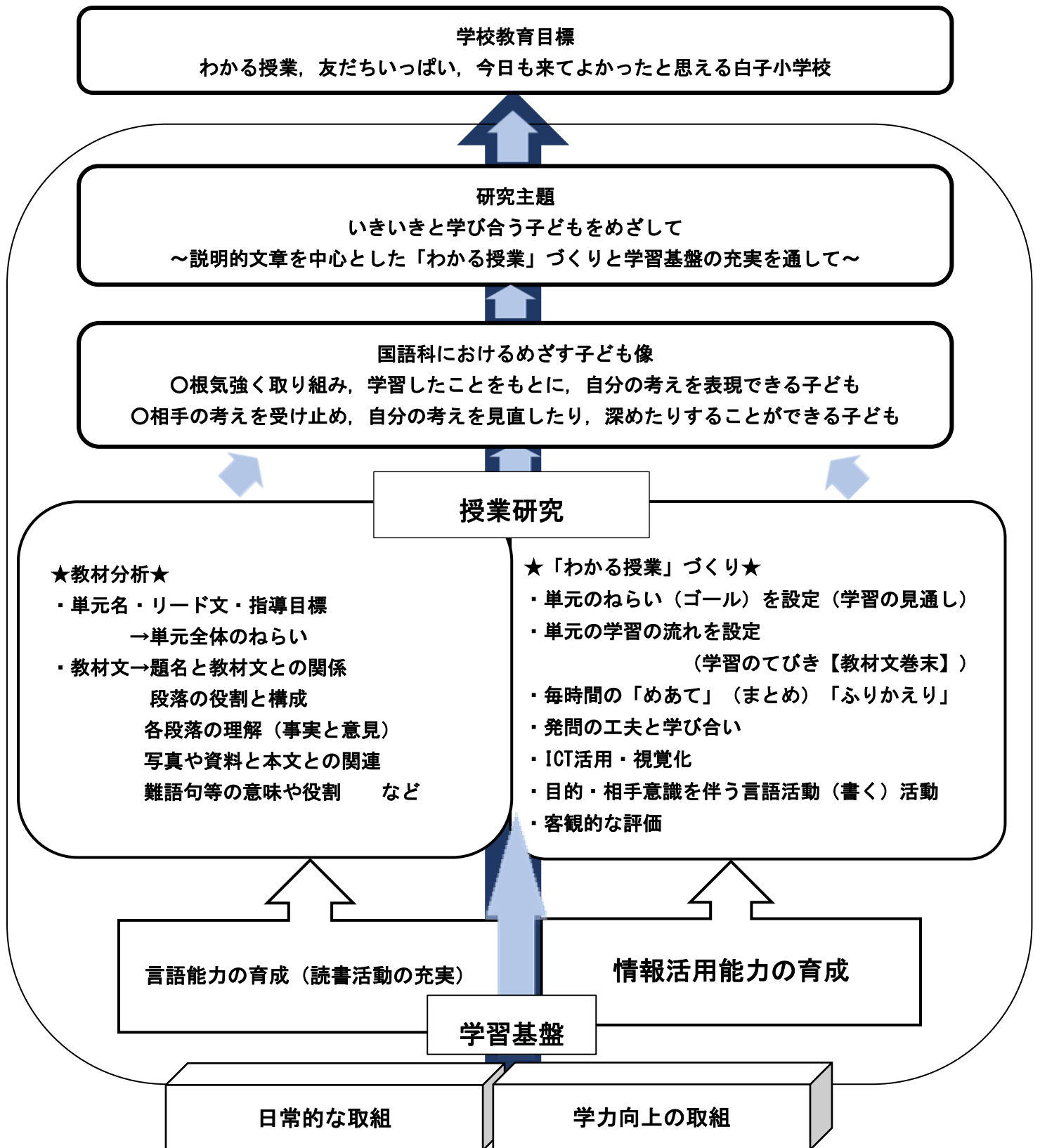
② 「情報活用能力」とは、「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」に分かれ、それぞれ、以下のとおりである。（教育の情報化に関する手引き R1.12 文科省）

「知識・技能」→①情報・情報技術を適切に活用するための知識・技能 ②問題解決・探求における情報活用の方法の理解 ③情報モラル・情報セキュリティなどの理解

「思考力・判断力・表現力」→①問題解決・探求における情報を活用する力（プログラミング的思考・情報モラル・情報セキュリティを含む）

「学びに向かう力、人間性等」→①問題解決・探求における情報活用の態度②情報モラル・情報セキュリティなどについての態度

4. 研究構想図



5. 国語科におけるめざす子ども像

- ・根気強く取り組み，学習したことをもとに，自分の考えを表現できる子ども
- ・相手の考えを受け止め，自分の考えを見直したり，深めたりできる子ども

(低学年)

- ・自分の思いや考えをもち，既習した言葉を使って伝えられる子ども
- ・大切なことを落とさないように聞いたり読み取ったりし，自分と比べることができる子ども

(中学年)

- ・自分の思いや考えをもち，既習した言葉を使って筋道を立てて説明できる子ども
- ・話の中心に気をつけて聞いたり読み取ったりし，自分の考えを見直すことができる子ども

(高学年)

- ・目的や意図に応じて自分の思いや考えをもち，既習した語句や文型を活用し筋道を立てて説明できる子ども
- ・相手の意図をつかみ，人の考え方のよさに気づき自分の意見を振り返ることができる子ども

これらのめざす子ども像を児童自身にも意識させるため，各教室に以下の内容を掲示する。

低学年

じぶんなりのかんがえをもとう　すすんではなそう　ともだちのかんがえをよくきこう

中学年

ならったことをつかって考えをもとう　考えを伝えよう　考えをくらべ合おう

高学年

習ったことをつかって考えをもとう　自分の考えを説明しよう　考えを深め合おう

6. 具体的な方策

めざす子ども像に迫るために以下の手立てを用いていく。

(1) 授業研究の取り組み

①教材分析

○単元名・リード文・指導目標　を読み，単元全体のねらいをつかむ。

○教材文を読み，題名と教材文との関係

段落の役割と構成

各段落の理解（事実と意見）

写真や資料と本文との関連

難語句等の意味や役割　などを教師がしっかりつかんでおく。

②「わかる授業」づくり

○単元のねらい（ゴール・到達点）を設定（学習の見通し）

単元の導入時において、教師が意見文やパンフレット等、ゴールのモデルを示すようにする。あらかじめ教師が取り組むことで、児童のつまずきが予想され、そのための手立てを考えやすくなる。児童が「わかる」ことへ導ける結果になると考えられる。

○単元の学習の進め方を設定する。

（ICT 機器を活用した調べ学習・学習のてびき【教材文巻末】の活用など）

学習活動を進める中で、ICT 機器を活用することで、子どもの興味を刺激し、調べる・比べる学習活動の等の活動の活性が期待できる。また、教材文巻末を併用することで興味優先に陥ることなく学習の目的を進めることができる。

○毎時間の「めあて」「まとめ」「ふりかえり」

学習活動において、めあてに正対したまとめ、振り返りを大切にすることにより、児童は身についた知識や技能を確認し、その学習の意味を理解し、学んだことへの達成感を味わうことができる。そして、次への学習意欲が高まり、学力向上につながっていくと考える。

一方教師にとっても、児童のまとめ、振り返りを基に、授業で身につけるべき力がついたのかを確認することができ、次時の授業に活かすことができる。

① めあて

その授業における教師側から捉えた目標やねらい（どのような力を身に付けさせたいか）を達成させるために、児童自身が「今日は何を考えるのか」「何ができたらよいのか」意識するためのもの。問題を理解させた後、既習と未習の違いや思考のズレに着目させ、児童からひきだしたり、指導者が提示したりして設定する。こうすることで、主体的・意欲的に学習を進めることができる。その際、授業の「まとめ」と正対するように設定する。

② まとめ

めあてとまとめの両者は基本的に正対している。教師がその授業でねらっている身につけさせたことや指導事項がそれにあたる。具体的な問題の解決を通して、児童自身が「何が分かったのか」「何が身についたのか」まとめる。キーワードとなる部分を穴抜きにした文章を提示し、そこを埋めるような方法から、めあてに呼応するような書き出しを確認した上で、児童自身にキーワードをつないで文章化させる方法へと段階的に指導していく。

③ 振り返り

内容面でのまとめを踏まえ、1時間の自分の学びについて児童自身が「どう学んだのか」「どうして解決できたのか（できなかったのか）」「友だちどうしの学び合いはうまくできたか」など学習態度面や自分自身の理解度を振り返る。

また、本時で身についた考え方を活用し、思考の過程を確認しながら適用問題を解き「わかった」「できた」と自己評価することも、達成感を感じた振り返りと考える。

【板書の色分け】

めあて・・・青で囲む。

振り返りやまとめ・・・赤で囲む。

算数用語・本時のキーワード・・・黄色

○単元を見据えて学習活動の中に伝え合う場面（ペア・グループ・全体）を設定する。

①授業展開を見通し、学習効果が期待できる場面で計画的に位置づける。

期待できる学習効果

- ・自分の考えの糸口をつかむために（ヒント）
- ・自分の考えを確かにするために（自信）
- ・互いの考えの共通点・相違点に気づくために（比較）
- ・考えを出し合い、協働して解決するために（練り上げ）
- ・正しく理解できたかを把握するために（確認）

場面

- ・曖昧な状況から解決への見通しをもたせる必要がある場面
- ・多様な考えを引き出す必要がある場面
- ・多様に出た考えを収束させる必要がある場面
- ・思考を深めたり、広げたりする必要がある場面

②話す・聞く双方向の伝え合いを意識する。

- ・児童一人ひとりが自分なりの考えをもつ。
考えがはっきりもてない場合、「・・・が分からない」「ここまで分かったけど・・・」
「どう考えたの？」が言える学級の雰囲気醸成し、そういったことも学び合いであることを意識する。
- ・既習した文型や語句を意識して使い、自分の考えを伝える。
- ・話す友だちの方を見て、うなずいたり、「なるほど」「そうそう、ぼくも同じ」など、反応したりしながら聞く。

○ICT 活用

○目的・相手意識を伴う言語活動（書く）活動

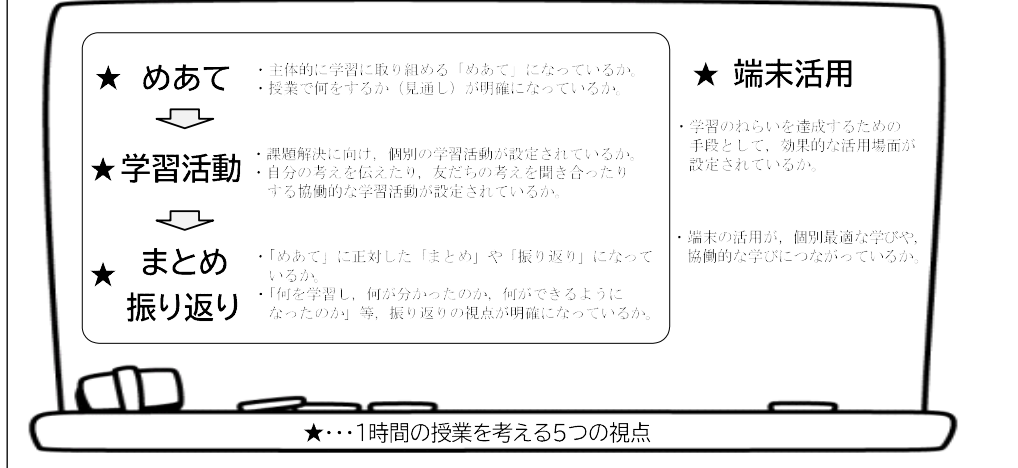
○客観的な評価 学調、スタディチェックなどの活用

- ① 主な単元後に各単元と関連する問題を選定していく。
- ② 学期ごとに期末まとめテストを行う。

「授業力UP5★」

～子どもたちが主役の授業へ～

資質・能力：育成を目指す「資質・能力」が明確になっているか。
 ・これらの達成した児童生徒の姿が具体的に想定できているか。



(2) 学力向上の取組

- ① 学調・みえ SC への取組（直前の対策）
- ② 学調・みえ SC 結果分析と改善策の検討
- ③ 朝の学習
- ④ 家庭学習

・家庭学習の手引きを作り、保護者に向けて啓発する。（学級懇談会で配布）
 宿題の基本 → 音読・漢字・計算（・復習プリント）

時間の目安 10分×学年数+10分

⑤ サマースクール（夏休み補充学習）

・3日間程度 補充学習が必要な児童が参加

⑥ 学習ボランティア活用

- 学習支援（支援・〇付け・読み聞かせ・校区案内）
- 技能補助（ミシン・裁縫・調理実習・工作補助・書道補助）
- など

(3) 言語能力の育成（読書活動の充実）

- ① 読書のあゆみ
- ② 夏冬休みの読書カード
- ③ 読書貯金・読書ビンゴ
- ④ 秋のファミリー読書
- ⑤ 図書館支援員との連携（ブックトーク）
- ⑥ お話宅配便（教師の読み聞かせ）
- ⑦ ブックック（読み聞かせボランティア）

秋のファミリー読書

名前 _____ 年 組 _____

☆読んだ日は本に色をぬりましょう！（左欄は自分、右欄は家の人）

10/21(金)	10/22(土)	10/23(日)	10/29(日)	10/30(月)	10/31(火)
11/1(水)	11/2(木)	11/3(金)	11/4(土)	11/5(日)	
11/6(月)	11/7(火)	11/8(水)	11/9(木)		

感想

子ども	保護者
-----	-----

読み終わった本の名前

1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	

(4) 情報活用能力の育成

①ICT を活用した授業推進

(ICT サポーターとの連携のもと、月1回 ICT 推進委員会を開催する。)

- ・効果的・効率的な指導のための ICT 活用
- ・児童の言語活動の充実のための ICT 活用

②プログラミング教育の推進

③定期的なミニ研修会

④日常的なタイピングスキル向上の取組

(5) 日常的な取組

①自主プリ (ドリルパーク・学 Viva 含む)

○ねらい 既習事項の定着や自主的な学習態度の育成を図る。

○方法

- ・各学年45種類のプリントを入れた棚を各学年の教室前廊下に設置する。
- ・全校共通で「各学期50枚は取り組む」という目標を設定して、朝学習や自主学習、授業のすき間などの時間を活用して取り組む。
- ・児童は、様々な学年のプリント棚から自分が挑戦したいプリントを自由に取って取り組む。授業内容と関連づけて既習学年のプリントで復習したり、上の学年のプリントに挑戦したりする。
- ・プリントの添削は、学習ボランティアを中心に行う。(コロナ禍の間は例外) たくさんの種類があるため、学年ごとの提出ボックスを用意し、種類別に整理して提出させ、添削しやすい環境を整えている。
- ・添削が終わったプリントは、全校共通のファイルに挟んで、各学期の取組枚数を集計する。
- ・学習の進度・内容に応じて担任団でアレンジしてもよい。

②音声計算

○ねらい 計算力の向上や基礎学力の定着を図る。

○方法

- ・音声計算プリントと解答プリントの2種類を用意する。
- ・児童はペアになり「計算する側」と「答えを確認する側」に分かれて計算練習をする。決めた時間で交代し、お互いが計算練習を行う。
- ・プリントの内容によっては、各自で行うことも可能である。
- ・宿題として使う際には、必要分を持ち帰ったり、本読みカードに貼ったりして取り組む。

○内容

- ・たし算、ひき算、九九、わり算などの基本的な計算。
- ・公式などの算数のきまり

* 出典「パワーアップ読み上げ計算ワークシート」(明治図書)

③話し名人・聞き名人・声のものさし

④学習規律・学習環境整備 (学びの手引き)

⑤ノート指導

7. 研修会について

(1) 全体研集会

- ・ 全体研究授業は、とびうお1本、国語科3本、計4本。
- ・ 授業は45分間を原則とする。
- ・ 可能な限り、指導主事を招聘する。
- ・ 提案授業実施日までに、指導案を学年部で検討する。検討した指導案を、遅くとも2日前には、全員に配布する。教育指導課には、1週間前までには、送付する。
- ・ 学年の事前授業についても連絡し、可能な限り参観するようにする。
- ・ 事後研修会を行い、児童の様子を通して、右の視点で研究協議し、手立ての検証をする。
- ・ 事後研修会では、全員で協議する。

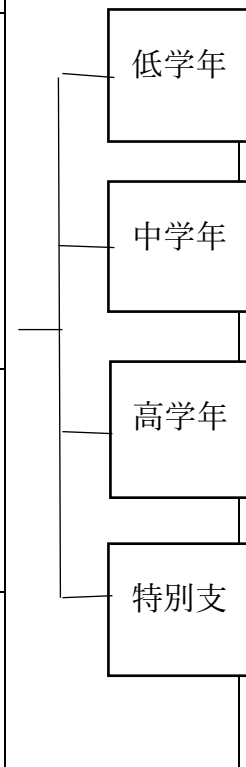
- ・ 「わかる授業」づくりはできていたか。
- ・ その他

(2) ミニ研修会について (ICT も含む)

- ・ 指導のワザ・コツを互いに交流し合い、指導力・授業力の向上を目指す。
 - ・ 20分程度とし、参加は希望者
- 例：教材分析の仕方
ICTを活用した授業実践
音読の工夫の仕方 など 研修内容の希望があれば研修部まで

8. 研修組織 研修委員仕事分担

研 修 長	授業研究	・教材分析と「わかる授業」づくりの研究 ・研究授業、研修会の推進	杉本 松井
	学力向上	・学調・みえ SC への取組 ・学調みえ SC 結果分析と改善策の検討 ・朝の学習 ・家庭学習 ・サマースクール ・学習ボランティア活用学調	松井 杉本 谷口
	言語能力の育成 読書活動の充実	・読書のあゆみ ・夏冬休みの読書カード ・読書貯金・読書ビンゴ ・秋のファミリー読書 ・図書館支援員との連携（ブックトーク） ・お話宅配便（教師の読み聞かせ） ・ブックック（読み聞かせボランティア）	若林 大山
	情報活用能力 の育成	・ICT 活用した授業推進（ICT サポーターとの連携） ・プログラミング教育の推進 ・定期的なミニ研修会 ・日常的なタイピングスキル向上の取組	表野 若林
	日常的な取組	・自主プリ（ドリルパーク・学 Viva 含む） ・音声計算 ・学習規律・学習環境整備 ・ノート指導	松井 大山
	評価	・評価規準・評価基準、所見の記入の仕方 ・あゆみ・指導要録	谷口



【参考】

- ICT 推進委員会（各学年 1 名・とびうお 1 名・フリー 1 名）
- ・授業研究・研修推進・・・（表野）（若林）※研修部 2 名（授業研究・学力向上担当）
 - ・端末・ドングル管理・年度更新作業・・・（西）（表野）（教頭）
 - ・ホームページ担当・・・・・・・・・・（中谷）（校長）
 - ・使い方・・・・・・・・・・（浅川）（江藤）
 - ・校務の ICT 化・・・・・・・・・・（青木）（養護）（教頭）

9. 2022年度の月別研修計画

月	日	研修内容
4 5	13	・第1回全体研修会 研究主題・研究内容・研究組織・研修計画など ・主な教材の評価問題を選定する。
6		・第2回全体研修会（授業研究）
7 8 19	下旬 月上旬 下旬	・サマースクール ・第3回全体研修会（教材研究）（ICT活用実践の交流） ・第4回全体研修会（模擬授業）主な教材の評価問題の選定（2, 3学期分） ・教研集会 ・教育講演会（学力調査分析）
10 11		・第5回全体研修会（授業研究） ・第6回全体研修会（授業研究）とびうお ・第7回全体研修会（授業研究）
2 2 3	1 8 8	・第8回全体研修会 「国語科」2022年度の反省・成果と課題 ・第9回全体研修会 「研修」2023年度の方向性 ・研修収録とじ

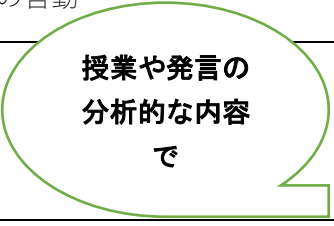
* 学年部研が適宜入る。

※ミニ研修会も適宜入る。

※学習公開も適宜入る。

※みえスタ・学力調査分析も入る。

10. 授業記録の取り方について

時間	教師の言動	子どもの言動	(考察)
			参観者が自由に 記入する。

* 参観者は、原則子どもと話さない。指導しない。授業者の机間指導の邪魔にならないようにする。

(1) 本時の目標

(2) 指導過程

時間	学習活動	指導上の留意点・支援
	1. 2.	・ 授業者の予想に反した児童にどのような対応をしていくのか、あるいは、問題が解けずに困っている児童に対してどのような手立てを施すのかといったことも記入していくようにする。

8. 授業を見る視点

- ・「わかる授業」づくりはできていたか。
- ・その他

13. 研究の経過

月	日	研 修 内 容
4	8	・ 第1回全体研修会 研究主題・研究内容・研究組織・研修計画など
7	1～10	・ 授業公開週間（とびうお）
	1	・ 第2回全体研修会 （人権レポート）
10	21	・ 第3回全体研修会 人権授業 2年
	30	・ 第4回全体研修会 算数 5年 （ビデオ研修）
11	13	・ 第5回全体研修会 算数 3年 講師 鈴鹿市教育委員会 指導課 小川
11	下旬	・ 研究授業（6年） ・ 研究授業（4年） ・ 研究授業（1年）
1	29	・ キャリア教育研修会
2	3	・ 第6回全体研修会 令和2年度の反省・成果と課題
2	10	・ 第7回全体研修会 令和3年度の方角性
3	10	・ 研修収録とじ